

# 『十訓抄』における平仮名諸本の本文系統について

泉 基博

## 一 はじめに

『十訓抄』における片仮名本と平仮名本の関係については、『甲南女子大学紀要創立三十周年記念号（平成七年三月）』（『十訓抄』における片仮名本と平仮名本の関係について）、以下『紀要三十周年記念号』と略称を用いる。）において解明できたので、この稿では平仮名本における諸本間の関係について見てみようと思う。なお使用本文、諸本の略称、本稿で使用する「片仮名本」および「平仮名本」の用語の使用法、説話番号については、『紀要三十周年記念号』を参照していただきたい。なお以下の考察においては、本文のないものは「欠文」、「欠字」

の用語を、本文はあるが本文の異なるものは「本文異同」「本文の異なるもの」の用語を用いることにする。

## 二 平仮名本はいくつの系統に分かれるか

片仮名本にくらべて平仮名本には多くの伝本があるが、ここでは大きな視野から平仮名本の分類をしてみようと思う。

H 片仮名本・京本・国本・天本・名本・吉本・彰本・静2  
本で欠文のあるもの

其詞云雖有<sup>レ</sup>飲羽之号未<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>首丘之実<sup>一</sup>ト有<sup>レ</sup>ニヨリ  
テ

（第一〇の三一話）

右記の傍線部は、異本・静1本・内本・武本・祐本では傍線

部の「実」と「ト」の間に小書きで「孤死首丘トイフコトアリ」とある。他の平仮名本は片仮名本と同じである。

I 異本・静1本・静2本・内本・武本・祐本で欠文のあるもの

城モナシカ、リモナシ惣テタチアフヘキ方モナシ

(第一の八話)

右記の傍線部は、異本・静1本・静2本・内本・武本・祐本にはなし。他の平仮名本は片本と同じである。

一事叶ヘ奉ラムヲノレハカツシラセ給タルラム小神通ヲ得  
タレハ

(第一の九話)

右記の傍線部は、異本・静1本・静2本・内本・武本・祐本にはなし。他の平仮名本は片本と同じである。

義家朝臣陸奥前司ノ比常ニ堀河右府ノ御許ニ参テ開幕ヲウ  
チケリイツモ小雑色一人ハカリヲ相共タリケリ大力ヲ持テ  
中門ノ内ノカラキシニ居タリケリ或日殺殿ニテ開幕ヲ打  
間追入レケリ犯人刀ヲヌキテ南庭ヲ走り通ルヲ前司義家カ  
候ソ罷留レト云ケルヲ聞入ス猶過ケレハソレカシ候由云聞  
セヨヤレトイフ其時雑色八幡殿ノオハシマス罷留レト云此  
事ヲ聞テ忽ニ留テ刀ヲナク仍雑色是ヲトラフ

(第一の四三話)

右記の傍線部は、異本・静1本・静2本・内本・武本・祐本にはなし。他の平仮名本では傍線部は次のようになってい

京……「ある日しん殿にしこをうつ間犯人を追入たり」

因……「ある日しん殿にしこをうつ間犯人を追入たり」

天・名・彰……「ある日しん殿にしてこをうつ間犯人を追入たり」

吉本……「ある内しん殿にしこをうつ間犯人を追入たり」

右記の傍線部がないと文意が通らないので、異本・静1本・静2本・内本・武本・祐本の本文の欠脱である。なお片本の本文の「大力」は平仮名本では「太刀」である。

主シ酒取テ飲セケルホトニ我モ人モ興ニ入テ主シカハラケ  
サストテ恐タルヨシ、テ瓶子取テアシク振舞ヘルヤウニテ

(第四の三話)

鳥帽子ヲツキ落シツ

右記の傍線部は、異本・静1本・静2本・内本・武本・祐本にはなし。他の平仮名本では傍線部は「ける程に我も人も興に入てあるしにかはらけさすとてをそれ」とある。右記の傍線部がないと説話としての文意が通らないので、異本・静1本・静2本・内本・武本・祐本の本文の欠脱である。

九条殿右大将ニテオハシケル頃讃岐三位ノ髀ニトリ奉テア  
ツカヒ聞エケルニ常ニ和歌ノ沙汰有ケリ清輔朝臣参テ物語

ノ次ニ

(第四の八話)

右記の傍線部は、異本・静1本・静2本・内本・武本・祐本にはなし。他の平仮名本は片本と同じである。右記の傍線部がないと説話としての文意が通らないので、異本・静1本・静2本・内本・武本・祐本の本文の欠脱である。

J 京本・国本・天本・名本・吉本・彰本と、異本・静1本・

静2本・内本・武本・祐本とに本文異同があるもの

譏諷ノ其キ孔墨ノサキヲモマカレカタシ(第一の一話)

右記の傍線部は、異本・静1本・静2本・内本・武本・祐本では「譏士」、名本では「誦諷」とあり、他の平仮名本は片本と同じである。名本の「誦諷」は「譏諷」の誤写である。

吾朝ニハ山蔭中納言筑紫へ下給ケル道ニ鶴飼ノコロサントシケル亀ヲカヒテハナチテケリ其后若君ノ二ツハカリナルヲ具シ給ヘルヲ(第一の七話)

右記の傍線部は、京本・国本・名本・吉本・彰本では「我君」、天本では「我君」、異本・静1本・静2本・内本・武本・祐本では「わか君」とある。「我君」では文意が通らない。「我君」については、「我君」の「我」は「若」の誤写とは考えられない。京本・国本・天本・名本・吉本・彰本の親本では「わか君」とあったものを、京本・国本・天本・名本・吉本・

彰本の書写者が「わがきみ」と読み「我君」と表記したのと思われる。片仮名本が平仮名本より先行すること(紀要三周年記念号)二項、三項参照)を考慮に入れると、「我君」↓「わか君」と考えるよりは、「若君」↓「わか君」↓「我君」と考えるのが妥当であることは、前述した通りである(紀要三周年記念号)四項参照)。

中々ナル事モソ云懸ル、ヤクナシトテ何トナキサマニテ婦

ニケリ(第一の一八話)

右記の傍線部は、京本・天本・名本・吉本・彰本では「や人なし」、国本では「や<sup>く</sup>人なし」とあり、他の平仮名本は片本と同じである。京本・国本・天本・名本・吉本・彰本の「や人なし」では文意が通らないので、「や人なし」の「人」は「く」の誤読であろう。異本・静1本・静2本・内本・武本・祐本の写本では「やくなし」以外では読むことができない。

以上のH、I、Jの用例を見てみると、特にI、Jの用例から、京本・国本・天本・名本・吉本・彰本と異本・静1本・静2本・内本・武本・祐本との本文は対立していると見える(Hの静2本は除く。静2本の本文の性質については別稿で解明したい)。すなわち平仮名本は大別すると二つのグループになるということである。以下、京本・国本・天本・名本・吉本・彰

本のグループを甲グループ、異本・静1本・静2本・内本・武本・祐本のグループを乙グループと呼ぶことにする。甲グループと乙グループとの関係については、Iの用例「第一の四三話」「第四の三話」「第四の八話」から甲グループが乙グループから成立したとは全く考えられないし、またJの用例「第一の七話」から乙グループが甲グループから成立したとするのには無理があるようであるので、両者の関係は親子関係にあるのではなく、兄弟関係にあるとするのが妥当であろう。

### 三 彰本・名本（甲グループ）とはどんな本文か

平仮名本が甲グループと乙グループとに大別できるといふことは、甲グループに属する諸本の本文のベースは同一系統の本文であり、乙グループに属する諸本の本文のベースは同一系統の本文であるということであるが、本文系統を説明するために各グループ内の本文をより細かく見ていく必要がある。ここでは甲グループにおける彰本・名本の性格について見てみようと思う。

K 片本と彰本の本文が同じで、他の平仮名本では欠文のもの

帝範ニハ其民ハ国ノサキ国ハ君ノ本トアリ旁猥クアナツリ  
カロムヘカラス  
(第一の一話)

右記の傍線部は彰本には「帝範ニハ其民ハ国のさき国は君の本と有」とあるが、他の平仮名本では欠文である。なお名本には「帝範には其の民は国のさき国は君の本なりかた／＼イ」と書き入れがある。

L 片仮名本と彰本の本文がほとんど同じで、他の平仮名本では欠文、欠文に近いもの

十徳トハ世オホエ種姓高貴和歌才学口キ、古歌オホエ以下  
条々ナリ  
(第一の三〇話)

右記の傍線部は、彰本では「世おほえ種姓高貴和歌才学口キ、おほえ等」、京本・国本・天本・名本・吉本では「彼等」、異本・静2本・祐本では「かられ」、静1本・内本・武本では「かれら」とある。なお名本には「世おほえ種姓高貴和歌才学口キ、古歌むかえ」と書き入れがあるが、これは本文中にはなく本文の上部空白に書き入れられたもので、完全に後入のものである。

イトアタニモノシ給トキ、シ人ニシモ有々テカクナムトワ  
カオモフ事ヲツカヒ人ノ云ヲ聞テイト心ウカリケルマ、ニ  
ニニナリテ  
(第五の一話)

右記の傍線部は、彰本では「かくなと我おもふことをつかひ人のいふをき、て」とあるが、他の平仮名本では欠文である。なお名本には「かくなと我か思事をつかひ人の云を聞いてイ」と書き入れがあるが、これも完全に後人のものである。

父母二此由ヲ申テユルサレテ蒙テ後宣ニ可随ト申ケリカク  
イミシキ心タテニヨリテアヤシクカタワナル身ナカラ后ト  
ナリニケリ  
(第五の一二話)

右記の傍線部は、彰本では「ナリニケリ」が「成りけり」とあるが、他は片仮名本と同じである。他の平仮名本では傍線部は欠文である。なお名本には「かくいみしき心たてによりてあやしくかたはなる身なから后となりにけりイ」と書き入れがあるが、これも完全に後人のものである。

朝夕カヨヒシ御文トモヲ入置レタル箱ノ百合ニモアマリタ  
ルヲアケテ見サセ給ニ付テモ  
(第五の一五話)

右記の傍線部は、彰本では「入をかせたるをこの百合にもあまりたるを」とあるが、他の平仮名本では欠文である。なお名本には「入置れたる箱の百合にもあまりたるをイ」と書き入れがあるが、これも完全に後人のものである。

ヒトシキ思ヲナス此ヲ賢人ト云又廉直ト名クサレハ臣軌ト  
申文ニ直臣ノフルマヒヲ書ノへ廉直ノ章ヲ分テ立タリ大方

カクレトモ

(第六の三一話)

右記の傍線部は、彰本では「廉直」が「廉潔」、「フルマヒ」が「振舞」とあるが、他は片本と同じである。なお吉片本も傍線部の「廉直」が「廉潔」とあるが、他は片本と同じである。他の平仮名本では欠文である。なお名本には「されは臣軌と申文に直臣のふるまひを書のへ廉潔の章を分てたてたり」と書き入れがあるが、これも完全に後人のものである。

毎事ウコキナク心カルカラヌハ此翁方心ニカヨヘルナトソ  
ミユル内外典ニヲシフルトコロ三十人ノ心ヲモツヘキ様也  
昔ヨリヨキ名ヲモタテアシキタメシニモイハル、只心ヒト  
ツノ至ストコロ也彼新豊ノ老人カ  
(第六の三三話)

右記の傍線部は、彰本では「トコロ三十」が「所皆」、「様」が欠字、「モタテ」が「たもち」とあるが、他は片本と同じである。なお吉片本も傍線部の「三十」が「ミナ」とあるが、他は片本と同じである。他の平仮名本では欠文である。なお名本には「内外の典をしふるところ皆人の心をもつへき様なり昔よりよき名をもたてあしきためしにもいわる、只心ひとつのいたすところなりイ」と書き入れがあるが、これも完全に後人のものである。

M 片本と彰本の本文が同じで、他の平仮名本と異なるもの

オホフヘキ袖コソナケレ世中ニサムケキ民ノ冬ノヨナク

(第一の一話)

右記の傍線部は彰本以外の平仮名本では「まつしき」とある。

女房達返シエセテヤミニケリ

(第三の二話)

右記の傍線部は、彰本では「止」、異本では「にげ」、他の平仮名本では「にかり」とある。

以上のK、L、Mの用例を見てみると、彰本から甲グループが出てきたとは考えられないので、甲グループから彰本が出てきたということになる。そうすると、彰本の本文のベースは甲グループの本文であるということになる。しかし、彰本の本文のベースが甲グループのどの本文かということは解明できない。またK、L、Mの用例から、彰本には片仮名本の本文が混入しているとはつきり言える。図式化すると次のようになる。

片仮名本……………

甲グループ ↓ 彰本

N 名本だけが欠文のもの

清隆御使也奇怪ノ事カナト思ナカラ数刻問答シテ帰参ノ時

障子ヲホソメニ明テヨヒ返シテ後官正二位中納言命ハ六十

六ソト云

(第一の二七話)

右記の傍線部は名本だけが欠文である。なお名本には傍線部

が書き入れとしてあるが、書き入れは後人・書写者とは別人のものと思われる。他の平仮名本は片本と同じである。欠文では文意が通らない。

シキテ間給ニカナクテ某ノ童ニコソト申ケリ即主ヲ召テ其

童参ラセヨト仰ラレケレハ参ラセケリ (第一の五一話)

右記の傍線部は名本だけが欠文である。なお名本には「申けり即主を召て其童参らせよとイ」と書き入れがある。名本の書き入れに「イ」とあることは、「一本に」ということであり、この書き入れは名本の親本のものではないと言える。他の平仮名本は片本と同じである。傍線部がないと全く文意が通らないことから、「某ノ童ニコソト申ケリ」に「ト申ケリ」、「其童参ラセヨト仰ラレ」に「ト仰ラレ」とあるので、名本の書写者の目移りによる欠脱であろう。

大臣ニ心無シテ忠ヲ以テ君ニ付ル今何ソ罪無シテ死ヤトナ

ケケケリ

(第六の一八話)

右記の傍線部は名本だけが欠文である。なお名本には「忠を以て君に付る今何ぞ罪なくしてイ」と書き入れがある。他の平仮名本では傍線部は、「付ル」が「つかふまつる」とあるが、他は片仮名本と同じである。これも、「一心無シテ」に「無シテ」、「罪無シテ」に「無シテ」とあるので、名本の書写者の目

移りによる誤写であろう。

○ 名本の本文だけが孤立しているもの

夢ナラテ又モアフヘキ君ナラハネラレヌキヲモ嘆カサラム

シ  
(第六の一六話)

右記の傍線部は、名本では「ならねは又我夢をみぬそかなしき」とあり、他の平仮名本は片仮名本と同じである。

以上、N、Oの用例を見ると、特にNの用例から、名本から甲グループが出てきたということになる。では名本の親本は甲グループのどれかということになるが、次の用例から天本ではな

いと言える。

大矢右衛門尉致経数多ノ従類ヲ具シテアヒタリ弓取直シテ

国司二会釈之間致経云爰ニ老翁ヤ一人アヒタテマツリテ候

ツラムアレハ愚父平五大夫ニテ候堅固ノ田舎人ニテ不知子

細サタメテ無礼ヲ現候ラムト云ケリ致経過テ後国司サレハ

コソ致頼ニテ有ケリト云ケリ (第三の一二話)

右記の傍線部は、京本・国本・名本・吉本では「致頼愚父」、

異本では「父」とあり、他の平仮名本は片本と同じである。

アヤシクテ誰人ニカト思程ニ此人云 (第四の二話)

右記の傍線部は、京本・国本・名本・吉本では「有」とあり、

他の平仮名本は片本と同じである。

人丸影其無益メツラシキ文アラハ色皮一枚ニハヲトリタリ

(第四の二話)

右記の傍線部は、京本・国本・名本・吉本では「影かなはたやくなし」、他の平仮名本では「影はなはたやくなし」とある。

サテ止ニハヤスカラスコトカラハカリオトサン

(第四の三話)

右記の傍線部は、京本・国本・名本・吉本では「覚物ことから」、他の平仮名本では「覚ゆことから」とある。

以上の用例から、名本の親本は京本・国本・吉本のどれか一本ということになるが、それは次の用例から解明できる。

夫ヲカロシメ外心アランハ (第五の七話)

右記の傍線部は、京本では「つ」、国本・吉本では「つ」、名本では「門」とあり、他の平仮名本は片仮名本と同じである。

なお名本には「門」の右傍に「心カ」と書き入れがあるが、これは完全に後人・書写者とは別人のものである。京本の「つ

(変体仮名「川」)は「門」と読めないこともない。国本・吉本には「心」の書き入れがあるので、国本・吉本から名本の「門」

が出てくることはなく、名本の「門」は京本から出てきていると言える。すなわち、名本の親本は京本であると言える。

#### 四 京本・国本・天本・吉本（甲グループ）

は親子関係か兄弟関係か

彰本・名本の本文の性格が解明できたので、ここでは甲グループからこの二本を除いた京本・国本・天本・吉本の相互の関係について見てみようと思う。

P 京本・国本・天本・吉本で欠文のあるもの

天神ノ御作ヲ詠シケレトモ猶猶聞入レサレハサリトモ菅丞

相ノ被仰シ事モ聞置テ侍也ト有ケレハ（第四の一〇話）

右記の傍線部は、京本・国本・天本・名本・吉本にはなし。

なお名本には「詠しけれども猶々聞入されはさりととも菅イ」と書き入れがある。異本・静1本・内本・武本・祐本では傍線部は「詠しけれどもなをき、入さりければさりととも菅」とあり、静2本では傍線部は「詠しけれどもなをくき、入さりければさりととも菅」とある。彰本では傍線部は片本と同じである。名本については前項の解明結果から問題にならないので、見出しを「京本・国本・天本・吉本で欠文のあるもの」とした。

Q 京本・国本・天本・吉本の本文が同じで、他の平仮名本と異なるもの

前世ノ戒力少クテ

（第一の八話）

右記の傍線部は平仮名本では次のようになっていいる。

京・国・天・吉……「戒形」 名……「戒行」 彰……「戒

類」 異・静1・静2・内・武・祐……「戒か」

異本・静1本・静2本・内本・武本・祐本の「戒か」の「か」は片本の「戒力」の「力」を誤読したものであろう。

P、Qの用例を見ると、Pの名本、彰本の本文については前項の解明結果から問題にならないので、大局的には京本・国本・天本・吉本が一グループをなし、異本・静1本・静2本・内本・武本・祐本が一グループをなしていると言える。これは一項で平仮名本を甲グループと乙グループに大別したことが誤りでなかったことを示していると言える。そして京本・国本・天本・吉本が純粹な甲グループであるとも言える。また京本・国本・天本・吉本は親族関係にあると言える。

R 京本・国本・天本の本文が同じで、他の平仮名本と異なるもの

崇徳院詠岐ニウツロハセ給テ後（第一の三話）

右記の傍線部は、京本・国本では「詠抄」、天本では「詠抄」、名本では「詠すき」、他の平仮名本では「詠州」とある。「詠抄」の「抄」は「州」の誤写、「詠すき」の「す」は「ぬ」の誤写である。



父ノ気色ヲ伺テ

(第三の一話)

右記の傍線部は平仮名本では次のようになってゐる。

京・天……「任」 国……「任」 名・静1・静2・内・

武・祐……「うか、ひ」 吉・彰……伺 異……「伺ひ」

京本・国本・天本の「任」では意味が通じないので、「任」は

「伺」の誤写である。

S 京本・国本・吉本の本文が同じで、他の平仮名本と異なるもの

岩ノ本ニテラ蛛ト云モノ

(第一の八話)

右記の傍線部は平仮名本では次のようになってゐる。

京・国・吉……「知虫」 天……「蜘蛛」 名・彰……「蟹」

異・静1・静2・内・武・祐……「蛛」

右記の平仮名本の本文をみるに、京本・国本・吉本の「知虫」は「蟹」の誤写であらう。

笠置ノ後ノ山ニ埋テ堂ヲタテナトシテ

(第一の八話)

右記の傍線部は、京本・国本・吉本・名本では「小関」とある。

他の平仮名本では「堂」とあるので、「小関」は「堂」を誤写したものであらう。

名本については前項の解明結果から問題にならないので、この用例をここに入れてもよいと思う。

奈良ヨリ放レニケリ

(第一の八話)

右記の本文は平仮名本では次のようになってゐる。

京・国・吉……「奈良内はらはれてける」

天・名・異・静1・静2・武・祐……「奈良内はらはれてける」

彰……「奈良よりはらはれてける」

内……「奈良内は、はれてける」

右記の平仮名本の本文をみるに、京本・国本・吉本の「奈良」は「奈良」の誤写であらう。また内本の「は、はれてける」の「、」は「ら」を誤読したものであらう。

其ハ争カ称ヘ給ヘキ

(第一の九話)

右記の傍線部は、京本・吉本では「年か」、国本では「年か」、

名本では「事」、異本・静1本・静2本・内本・武本・祐本では

「いかでか」とあり、天本・彰本は片本と同じである。京本・

国本・吉本の「年か」では文意が通じないので、京本・国本・吉本の「年か」は親本の「争か」の「争」を「年」と誤読したものであらう。これと同じ用例が他にもあるので示すことにする。

イカテ御覧セム

(第一の一四話)

右記の傍線部は、京本・吉本では「年か」、国本では「年か」、名本では「なとしか」とあり、他の平仮名本は「争か」とある。

人ノ有様ヲモ是等ニテ心ウヘシ

(第一の一話)

右記の傍線部は平仮名本では次のようになってゐる。

京……「得やへし」 国……「得やへし」 吉……「得や

へし」 名……「得なるへし」

天・彰・異・静1・静2・内・武・祐……「得つへし」

右記の平仮名本の本文をしてみると、京本・国本・吉本の「得やへし」では意味が通らないので、「得やへし」の「や」は「つ」の誤写であらう。

定子皇后ハ一条院ノ后也

(第一の二話)

右記の傍線部は、京本・吉本では「仙」、国本では「仙」とあり、他の平仮名本は片本と同じである。京本・国本・吉本の

「仙」は「后」の誤写である。

帥殿ハニカリテオハシケリ

(第一の四六話)

右記の傍線部は、京本・国本・吉本では「にかりて」の「に」の右傍に「あい」と書き入れがあるが、他の平仮名本には書き入れはなく本文は片本と同じである。

次に示す用例は国本に書き入れがあるが、本文は京本・国本・吉本の三本ともに同じであるので、ここに入れることにする。

此事如夢僧都ノ物語トテ人コトニシレリコマカニ書ス

(第一の七話)

右記の傍線部は、京本・吉本では「まかに」、国本では「まかに」、祐本では「こまに」、他の平仮名本は片本と同じである。京本・吉本の「まかに」は「こまかに」の「こ」の脱落であり、祐本の「こまに」は「こまかに」の「か」の脱落である。

人丸影其無益メツラシキ文アラハ色皮一枚ニハヲトリタリ

(第四の二話)

右記の傍線部は、京本・国本・吉本・名本では「影かなはたやくなし」、他の平仮名本では「影はなはたやくなし」とある。名本については前項の解明結果から問題にならないので、この用例をここに入れてもよいと思う。「影かなはたやくなし」では全く文意が通らない。

R、Sの用例を見ると、用例数はSがRを圧倒していると言える。このことは京本・国本・吉本の関係の方が京本・国本・天本の関係よりも親族関係が強いということを示していると言える。しかし京本・国本・吉本が親子関係にあるのか兄弟関係にあるのかは判断できない。

## 五 京本・国本（甲グループ）は親子関係か 兄弟関係か

前項で京本・国本が天本とよりも吉本と強い親族関係にあることは解明できたが、京本・国本・吉本が親子関係にあるのか兄弟関係にあるのかは解明できなかった。ここでは京本・国本の本文の考察から京本・国本・吉本の相互の関係について見てみようと思う。

T 京本・国本で欠字のあるもの

イカニシテ御産ナリヌトハ知ケルソト問セ給ニ障子ハ子ヲ  
サフト書テ候ニヒロクアキテ候ツレハ御産成ヌト存候ツル

ト申ケリ

（第一の二五話）

右記の傍線部は、京本・国本にはなし。他の平仮名本は傍線部は片本と同じである。傍線部「ハ子」がないと文意が通らな

い。

U 京本と国本の本文が同じで、他の平仮名本と異なるもの

山ハチキサキ坂ヲユツラス此故ニ高事ヲナス（第一の序）

右記の傍線部は、京本・国本では「ゆつる」とあり、文意が通らない。他の平仮名本は傍線部は片本と同じである。

ニクケレハトテ猥ク刑ヲモ不加シテ普ク均キメクミヲ施

スヘシ

（第一の序）

右記の傍線部は、京本・国本では「ふか刑して」とあり、文意が通らない。他の平仮名本では傍線部は「不加刑して」とあるので、京本・国本の「ふか刑して」は、京本・国本の親本の「不加刑して」の「不加」を「ふか」と平仮名表記したために文意が通らなくなったものである。

宮ツクリモ儉約ナルヘキト云ヨシ也

（第一の二話）

右記の本文は平仮名本では次のようになってい

京・国……「宮作ることかく儉約を宗とせられける也」

天・彰・異・静1・静2・内・武・祐……「宮作りとかく儉約を宗とせられける也」

名・吉……「宮作るとかく儉約を宗とせられける也」

V 京本と国本と他の平仮名本とに本文異同があるもの

燈ヲ人ノ吹ケチタリケレハ

（第一の一四話）

右記の傍線部は、京本では「けち、たりたれば」とあり、意味が通じない。国本では傍線部は「けちくたりたれば」とあり、名本では傍線部は「けちたりたれば」とある。他の平仮名本は傍線部は片本と同じである。

W 国本だけが欠字（欠文）のもの

ウヤエホシ、テソ居給タリケル

（第一の二一話）

右記の傍線部は、国本では欠字であるが、他の平仮名本では「ゐ」とある。「居」がないと文意が通らない。

スヘテ歌ノ判ハ

(第一の三〇話)

右記の傍線部は、国本では欠けているが、他の平仮名本では「惣」とある。片本にも他の平仮名本にも「すへて」「惣」があるので、国本の欠脱ということになる。

主ノ思ハム事ヲ憚テ

(第一の五一話)

右記の傍線部は、国本では欠けているが、名本では「ぬしの」、異本・静1・静2・祐本では「わか主の」、内本では「か王の」とあり、他の平仮名本は片本と同じである。

以上のT、U、V、Wの用例を見ると、T・U（「第一の序」）の用例から京本・国本は吉本または天本から出てきたと言える。この逆は考えられない。京本・国本が吉本と強い親族関係にあること（四項）から考えて、京本・国本は吉本から出てきたと言える。四項のRの用例は、京本・国本が吉本から出てきたとすることに反するものであるが、四項のRの用例はわずか二例であり、それも二例ともに漢字一字の異同であるので、京本・国本が吉本から出てきたことを否定する用例にはならない。次の用例も京本・国本が吉本から出てきたことの証の一つになると思う。

伊成八目カケナカラ畏テ居タルヲ

(第三の一話)

右記の傍線部は平仮名本では次のようになっていいる。

京・国……「目をめけなから」 天・名・彰・異・静1・

静2・武・祐……「目をかけなから」

吉……「目をあけなから」

右記の平仮名本の本文を見ると、京本・国本の「目をめけなから」では意味が通じない。京本・国本・天本・吉本における相互関係を考えてみると、天本の「目をかけなから」の「か」を「め」と誤読することはないと思うが、吉本の「目をあけなから」の「あ」を「め」と誤読することは十分に考えられる。これも京本・国本が吉本から出てきたことを示していると言える。

次に京本と国本との関係についてであるが、V、Wの用例からでは京本と国本とが親子関係にあるのか兄弟関係にあるのかは判断しにくい。そこでこれまでの用例における両者の書き入れに注目してみたいと思う。京本と国本とは多くの書き入れがあるが、「讃抄」(第一の三話)・「一条院の仙也」(第一の一話)のように京本と国本との書き入れが一致するものと、「まかに書す」(第一の七話)・「年か」(第一の九話)・「年か」(第一の一四話)・「けちくたりたれば」(第一の一四

話)・「や<sup>ん</sup>人なし」(第一の一八話)・「ある日しん殿にし<sup>ん</sup>こをうつ間犯人を追入たり」(第一の四三話)・「任」(第三の一話)のように国本にだけ書き入れのあるものがある。国本にだけある書き入れは誤字、脱字、衍字を訂正したものであり、国本の本文のままでは意味が通じないものばかりである。もし国本から京本が出てきたのであれば、京本の書写者は国本の本文では意味が通じないのであるから、当然国本の書き入れを本文に取り入れるか、または本文に国本の書き入れも書写したであろうが、京本では国本にある誤字、脱字、衍字を訂正した書き入れによる本文の訂正も国本の書き入れもないのである。このことは京本が国本から出てきたのではないことを示していると言える。そうすると京本から国本が出てきたのか、京本と国本とは兄弟関係にあるのかということになる。そこで京本と国本とにだけある書き入れを「十訓抄」全体で調査してみると、京本と国本との書き入れが一致するものが二〇例、京本だけに書き入れのあるものが二一例、国本だけに書き入れのあるものが八五例である。これらの書き入れのすべては誤字、脱字、衍字である。京本にだけある書き入れを見ると、すべてが国本の本文に取り入れられているのに対し、国本にだけある書き入れを見ると、全く京本には取り入れられていないのであ

る。京本と国本とが兄弟関係にあるとすれば、京本と国本との書き入れが一致するものが二〇例あること、京本にだけある書き入れ(二一例)はすべて国本の本文に取り入れられていることとから考えて、国本にだけある書き入れが八五例もあることは、これらの書き入れがある程度親本にあったのではないかということが考えられる。そうすると、そのうちの何例かは当然京本に取り入れられるはずである。それにもかかわらず、京本には国本にだけある書き入れが全く取り入れられていないということは、京本と国本との関係は兄弟関係ではないと言える。すなわち、京本と国本との関係は親子関係(「京本↓国本」)であるということになる。京本と国本との関係が兄弟関係でなく、親子関係(「京本↓国本」)であるということ、京本と国本は吉本から出てきたということ(前述)とを考え合わせると、京本の親本は吉本であるということになる。図式化すると次のようになる。

吉本↓京本↓国本

天本と吉本との関係については、四項のR、Sから吉本より天本の方が誤写が少ないとは言えるが、天本と吉本とが親子関係にあるのか兄弟関係にあるのかは判断できない。

## 六 吉本・天本（甲グループ）は親子関係か

### 兄弟関係か

天本と吉本とが親族関係にあること（四項のP、Qの用例から）は確かであるが、両者の関係が親子関係にあるのか兄弟関係にあるのかについてはまだ解明できていないので、ここではこのことについて見てみようと思う。

後江相公ノ證明ニヲクレテ後世ヲ訪レケル願文ニ（以下に願文があるが略す）  
（第九の七話）

右記の傍線部は、京本・国本・名本・吉本では欠文である。静2本では傍線部は片仮名本と同じである。他の平仮名本では傍線部は「後江相公の証明にをくれてかの後世をとふらはれける願文にはく」とある。なお名本には「後江相公の証明にをくれて後世を訪れける願文に」と書き入れがあるが、これは完全に後人のものである。天本と吉本との関係だけで右記の傍線部の本文を考えると、右記の傍線部の本文が天本にあつて吉本にないということは、吉本から天本が出てきたのではないと言える。そうすると、天本から、または天本と親族関係にある別の伝本から、吉本が出てきたということになる。傍線部は第九の七話の冒頭であるので、天本のこの箇所の表記形式を見てみ

ることにする。天本では次のようになってゐる。

後江相公の証明にをくれてかの後世をとふらはれける願文にはく

（願文があるが略す）

右記の表記形式から考えて、吉本の書写者が「後江相公の証明にをくれてかの後世をとふらはれける願文にはく」の二行を書き落としてしまうことは、十分に考えられる。しかし、吉本の書写者が傍線部の本文を書き落としたのか、吉本の親本に傍線部の本文がなかったのかは判断できない。そこで天本には多くの書き入れがあるので、天本の書き入れから見ようと思う。

其願文ヲ橘贈納言広相ニ被書ケレハ（第五の一五話）

右記の傍線部は、京本・国本・名本・吉本では「贈中納言」、天本では「贈・納言」とあるが、他の平仮名本は片仮名本と同じである。右記の傍線部の本文と、「第九の七話」の用例（天本の本文が吉本では欠文）とを考え合わせると、吉本の「贈中納言」の「中」は天本の書き入れ「中歟」が本文として取られたものということになる。しかし、ここでも吉本の親本（天本と親族関係にある別の伝本）に「贈中納言」とあり、それが取られたのではないかという問題が残る。そこで天本の書き入れ

を「十訓抄」全体で調査し、その書き入れと吉本との関係について見てみようと思う。天本の「十訓抄」における書き入れは二〇四例ある。欠文箇所<sup>中</sup>の書き入れは次に示す一例だけで、他の二〇三例は誤字、脱字、衍字の訂正である（うち二例は「イ歎」とある。）。

心ワロキモノニ思食ル、ヤウノアレハコソトテヤカテ仁相  
寺ナル所ニ籠居ニケリチカラヲモ不入シテ天地ヲウコカシ  
目二見エヌ鬼神ヲモ哀ト思ハスト古今集ノ序ニカ、レタル  
ハ是等ノ類也  
(第一〇の一五話)

右記の傍線部は、天本では欠文である。他の平仮名本では傍線部は、「ヤカテ」がなくて、「籠居ニケリ」が「こもり居てけり」とあり、他は片仮名本と同じである。なお天本には「仁和寺なるところにこもり居てけり力をもいれずして」と書き入れがある。

次に天本の書き入れ「イ歎」とある二例について見てみると、一例は前掲の「贈・納言」<sup>中</sup>（第五の一五話）であり、もう一例は次に示すものである。

和泉国日根ト云所ニテ説ケル古里ノタヒネノ夢ニミエツル  
ハウラミヤスランマタモトハネハ  
(第六の一話)

右記の傍線部は、京本・国本・天本・吉本では「とはねと」<sup>中</sup>

とある。他の平仮名本では傍線部は片仮名本と同じである。

では天本（前掲の「贈・納言」<sup>中</sup>（第五の一五話）・「仁和寺なるところにこもり居てけり力をもいれずして」<sup>中</sup>（第一〇の一五話）・「とはねと」<sup>中</sup>（第六の一話）の三例は除く）における誤字、脱字、衍字の訂正の書き入れ二〇一例について見てみることにする。これらの書き入れは一例を除いてすべて吉本の本文と一致するものである。これに前掲の「贈・納言」<sup>中</sup>（第五の一五話）・「仁和寺なるところにこもり居てけり力をもいれずして」<sup>中</sup>（第一〇の一五話）・「とはねと」<sup>中</sup>（第六の一話）の三例を加えると、天本の二〇三例の書き入れはすべて吉本の本文および書き入れと一致しているのである。天本の二〇三例もの書き入れが、すべて吉本の本文および書き入れと一致しているということと、「第九の七話」の用例（天本の本文が吉本では欠文）とを考え合わせると、吉本は天本から出てきたと考えてよいと思う。吉本と天本との関係が兄弟関係であると考えられないのは、もし吉本と天本とが兄弟関係であれば、天本の書き入れ二〇四例のうち二〇三例もが吉本の本文および書き入れと一致するということは不可能に近いからである。四項のRの用例は、吉本が天本から出てきたことに反するものであるが、四項のRの用例はわずかに二例であり、それも二例ともに漢

字一字の異同であるので、吉本が天本から出てきたことを否定する用例にはならない（Rの『第三の一一話』の天本の「任」は天本の写本では「伺」と読めないこともない）。天本は二冊本であり、それぞれの最終丁に「一枚了」とあるので、吉本の親本は校了後の天本ということになる。なお天本の書き入れが吉本と一致しない一例は次に示すものである。

吾朝ニハ山蔭中納言筑紫へ下給ケル道ニ鶴飼ノコロサントシケル亀ヲカヒテハナチテケリ其后若君ノニツハカリナルヲ具シ給ヘルヲ  
(第一の七話)

右記の傍線部は、天本では「我君」、吉本では「我君」とある。前述の天本の書き入れと吉本との関係からすると、吉本の書写者が天本の書き入れを落としたのであろう。

次にあげる六用例も吉本の親本が天本であることを示す証の一つになると思う。

笠置ノ後ノ山ニ埋テ堂ヲタテナトシテ  
(第一の八話)

右記の傍線部は、京本・国本・吉本・名本では「小関」とある。他の平仮名本では「堂」とあるので、「小関」は「堂」を誤読したものであろう。天本の写本では「小関」と読めないこともない。

奈良ヨリ放レニケリ  
(第一の八話)

右記の本文は平仮名本では次のようになっている。

京・国・吉……「奈良内はらはれてける」

天・名・異・静1・静2・武・祐……「奈良内はらはれてける」  
彰……「奈良よりはらはれてける」

内……「奈良内は、はれてける」

右記の平仮名本の本文を見ても、京本・国本・吉本の「奈良」は「奈良」の誤写であらう。天本の写本では「奈良」の「良」を「郎」と読めないこともない。

アヤシクテ誰人ニカト思程ニ此人云  
(第四の二話)

右記の傍線部は、京本・国本・名本・吉本では「有」とあり、他の平仮名本は片本と同じである。天本の写本では「にか（変体仮名「尔可」）」は「有」と読めないこともない。

人丸影其無益メツラシキ文アラハ色皮一枚ニハトトリタリ  
(第四の二話)

右記の傍線部は、京本・国本・吉本・名本では「影かなはたやくなし」、他の平仮名本では「影はなはたやくなし」とある。天本の写本では「影はな」の「は」（変体仮名「八」）は「か（変体仮名「可」）」と読めないこともない。

汝カ父想ニ是ヲ嘗テ久ク成ヌ  
(第四の二話)

右記の傍線部は、京本・国本・吉本では「又懸子」、天本・名



本・彰本では「又懸に」、異本・静1本・内本・武本・祐本では「又念比に」、静2本では「又年比に」とある。天本の写本では「又懸に」の「に」(変体仮名「尔」)は「子」と読めないこともない。

サテ止ニハヤスカラスコトカラハカリオトサン

(第四の三話)

右記の傍線部は、京本・国本・名本・吉本では「覚物ことから」、他の平仮名本では「覚ゆことから」とある。天本の写本では「覚ゆことから」の「ゆ」(変体仮名「由」)は「物」と読めないこともない。

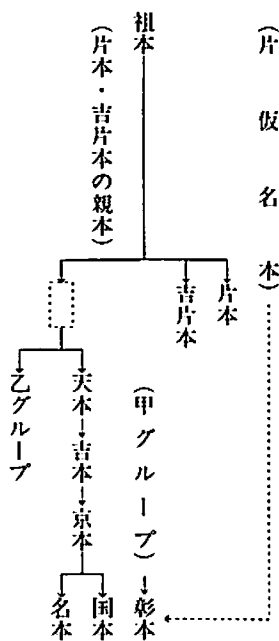
以上あげた六例は、すべて吉本の誤読と考えられるものであるが、天本の写本ではその箇所すべてが誤読できない状態なので、これらの用例も吉本の親本が天本であることを裏付ける一助になると思う。吉本の親本が天本ということになると、次の用例もうまく解することができる。

大矢右衛門尉致経数多ノ徒類ヲ具シテアヒタリ弓取直シテ  
 国司ニ会釈之間致経云爰ニ老翁ヤ一人アヒタテマツリテ候  
 ツラムアレハ愚父平五大夫ニテ候堅固ノ田舎人ニテ不知子  
 細サタメテ無札ヲ現候ラムト云ケリ致経過テ後国司サレハ  
 コソ致頼ニテ有ケリト云ケリ

(第三の一二話)

右記の傍線部は、京本・国本・名本・吉本では「致頼愚父」、異本では「父」とあり、他の平仮名本は片本と同じである。天本には「愚父」の右傍に「致頼」とあることから、吉本の「致頼愚父」は、吉本の書写者が天本の傍注「致頼」を本文に取り込んだものである。

「紀要三十周年記念号」の結論と二項、三項、五項、六項の考察結果をまとめて図式化すると次のようになる。



七 異本・静1本・祐本(乙グループ)は親子関係か兄弟関係か

平仮名本は大別すると甲グループと乙グループとなるが、甲グループの本文系統については解明できたので、ここからは乙グループの本文系統について見てみようと思う。

X 異本・静1本・祐本の本文が同じで、他の平仮名本と異なるもの

彼松二位ヲ授テ五位大夫ト云リ

(第一の一五話)

右記の傍線部は、異本・静1本では「五位大夫」、祐本では「五位太夫」、名本・彰本・静2本・内本では「五大夫」とあり、他の平仮名本は片本と同じである。

大方ハ心操モオサマリ才幹モ有テヨキ人ト云初ラヌレハ  
少々失アレトモ世ニモ人ニモ必思ユルサル、也大勞身ニ有  
時ハ少過チアリト云トモ凶トセストイヘルカ如シ

(第一の一五話)

右記の傍線部は、異本・静1本・祐本では「凶とす」とあり、他の平仮名本は片本と同じである。なお本文の「大勞」は平仮名本では「大節」とある。異本・静1本・祐本では全く文意が通らない。

師子ニマイテ参タリケル

(第一の一五話)

右記の傍線部は、異本・静1本・祐本では「まいりたり」とあり、他の平仮名本は片仮名本と同じである。

Y 静1本の本文だけが孤立しているもの

イキヲヒクラフルニ

(第一の八話)

右記の傍線部は、静1本では「せ」とあり、他の平仮名本で

は「勢」とある。「せ」では意味が通じないので、「せ」は「勢」を誤読したものである。

今ノ天狗ノ所変ニカハラサリケリ

(第一の一〇話)

右記傍線部は、静1本では「ところ変」とあり、他の平仮名本は片本と同じである。静1本の「ところ変」は他の平仮名本の「所変」の「所」を誤読したものであり、文意が通らない。

Z 静1本と他の平仮名本とに本文異同があるもの

古事ヲ思出ケルニヤ

(第一の一五話)

右記の傍線部は、静1本では「ふるききこそ」、京本・国本・天本・名本・吉本・彰本では「ふるること」、異本・静2本・内本・武本・祐本では「ふるきこと」とある。静1本の本文では意味が通じない。

a 静1本、内本・武本の本文が同じで、他の平仮名本と異なるもの

御懐ヨリ匣ライクラトモナク取出テヲコシタル火ニクヘサ

セ給タリケレハ明タトシテヨク御ラムセラレケリ

(第一の一四話)

右記の傍線部は、静1本・内本・武本では「御座せ」、他の平仮名本では「御覽せ」(名本では「御らんせ」とある。「御座せ」では文意が通らない。

b 異本だけが欠文のもの

ツフヤキタリケレハ院ノ御気色カハリテ悪カリケレハ立ケルヲ召返シテ  
(第四の二話)

右記の傍線部は、異本では欠文であるが、他の平仮名本では「院御気色かはりてあしかりければ」とある。

慶祚後夜ノ行ヒセントテ縁ニ出テ<sup>出</sup>閻伽ヲ供ケル間空ニ芳キ  
ニホヒアリテ  
(第五の四話)

右記の傍線部は、異本では欠文であるが、京本・天本・名本・彰本・静1本・静2本では「出<sup>出</sup>て閻伽水を供しけるに空に」、内本・吉本・武本・祐本では「出<sup>出</sup>て閻伽水を供しけるに雲に」、内本では「出<sup>出</sup>て閻伽水を供しけるにせいに」とある。

c 異本の本文だけが孤立しているもの  
ミニ勝タル才能ナケレハ  
(第六の三五話)

右記の傍線部は、異本では「すくれたる」、静1本・静2本・内本・武本・祐本では「かちたる」、他の平仮名本は片仮名本と同じである。「勝タル」と「かちたる」とを同じと考へなかつたのは次のように考へたからである。「かちたる」では意味が通じないので、片仮名本が平仮名本に先行すること(「紀要三十周年記念号」二項、三項参照)から、「勝タル」から「すくれたる」「かちたる」が出てきたと考へたからである。

d 静1本と祐本の本文が同じで、他の平仮名本と異なるもの

万ノ行キニハ何ト聞エケン思ヨラス人モ知ヌ時モ  
(第九の二話)

右記の傍線部は、静2本は片仮名本と同じであるが、静1本・祐本では「いつな、けん」、内本では「いつるき、けん」、他の平仮名本では「いつかき、けん」とある。内本・武本の本文は意味が通じないことはないが、静1本・祐本の本文では全く意味が通じない。

都ニアリナカラ此歌ヲ出サン事無念ト思テ(第十の九話)

右記の傍線部は、静1本・祐本では「ね人なり」、内本では「ね人なし」、他の平仮名本では「ねんなし」とある。「ね人なり」「ね人なし」では意味が通じない。「ね人」の「人」は「ん」の誤読である。

e 祐本の本文だけが孤立しているもの

其夜ノ夢ニカキノ水早袴着タル男ノ来テ(第一の八話)

右記の傍線部は、祐本では「水」とあり、他の平仮名本は片本と同じである。「水」では文意が通らないので誤写である。以上のX、Y、Z、a、b、c、dの用例を見ると、Xの用例から、異本・静1本・祐本は親族関係にあると言える。

またY、Zの用例から、静1本は異本または祐本から出てきたということになる。この逆は考えられない。そしてb、c、dの用例があることから、静1本は祐本から出てきたと言える。

eの用例は静1本が祐本から出てきたことに反するものであるが、「其水の夢に」は誰が見ても誤りであることと、祐本の写本では「水」の筆遣いからして「夜」と読めないこともないことから、静1本が祐本から出てきたことを否定する用例にはならない。しかし、次のような用例から静1本と祐本とが親子関係にあるとは言えない。

\* 異本、静2本、祐本で欠字のあるもの

札ムマシトノ給へハユメノト口カタノテ林中ニ隠ヌ

(第一の一〇話)

右記の傍線部は、異本・静2本・祐本では欠字であるが、静1本・内本・武本では「努」とあり、他の平仮名本は片本と同じである。異本・静2本・祐本のように傍線部が欠けていると全く文意が通らない。

\* 異本・静2本・祐本の本文が同じで、他の平仮名本と異なるもの

御心中サコソ忍カタク覚サセ給ケメ (第一の一二話)

右記の傍線部は、異本・静2本、祐本では「いかに」とあり、

他の平仮名本は片本と同じである。

皇子御誕生有テ程ナク位ニ即キ給後一条天皇是也

(第一の二四話)

右記の傍線部は、異本・静2本・祐本では「後一条院天皇」とあり、他の平仮名本は片本と同じである。

大食調残ナクツクサレケリ

(第一の四四話)

右記の傍線部は、異本、静2本、祐本では「尽させられ」、他の平仮名本では「尽され」とある。

\* 静2本・祐本の本文が同じで、他の平仮名本と異なるもの  
不運ナルモノヲハ所行事カラヨカラヌヤウニ思

(第三の序)

右記の傍線部は平仮名本では次のようになっていいる。

京・国・天・吉……「ふこん」 名……「ふかく」 彰・

異……「ふうん」 静1・内・武……「ふうむ」 静2・

祐……「ふうき」

右記の平仮名本の本文を見ているに、静2本・祐本の「ふうき」では文意が通らない。

以上の五例は静1本の本文と祐本の本文とが一致しないものであるが、特に「第三の序」の用例からは静1本が祐本から出てきたとは考えられないので、静1本と祐本との関係は兄弟関

係であるということになる。

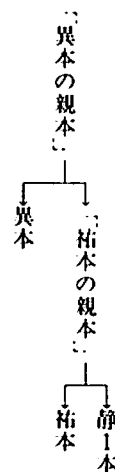
次に異本と祐本との関係については、Xの用例から両者は親族関係にあると言える。そしてその関係はb、cの用例があることから、祐本は異本から出てきたとは言えない。また、これらの用例からは異本と祐本とが親子関係（「祐本→異本」）にあるのか兄弟関係にあるのかは判断できないが、次に示す用例から解明することができると思う。

ウツフシニマロヒヌアヘナキ事限ナシ（第三の一話）

右記の傍線部は、静2本では「かなし」、祐本では「かなし」とあり、他の平仮名本は片本と同じである。

右記の平仮名本の本文を見ると、祐本の「かなし」では意味が通じない。しかし、祐本の「かなし」には「本ノマ、」と書き入れがあるので、祐本の親本には「かなし」とあったことになる。乙グループの他の平仮名本（静2本、祐本以外）の「限ナシ」の表記を見てみると「かきりなし」である。「かなし」から静2本の「かなし」が出てくることは考えられる（「かなし」では意味が通じないので、「かなし」の「な」を一つ取って「かなし」とする）が、「かなし」から「かきりなし」が出てくることは考えられないので、異本の親本は祐本ではないと言える。それでは両者の関係は兄弟関係か

というと、祐本の親本は「かなし」であるから、祐本の親本が異本の親本であるとは言えない（「かなし」から「かきりなし」が出てくることは考えられないから）。すなわち、異本と祐本の親本は異なるということになる。図式化すると次のようになる。



## 八 静2本と平仮名本（乙グループ）の本文との関係はどうか

ここでは静2本の乙グループにおける本文系統について見てみようと思う。

f 異本・静2本・祐本で欠字のあるもの

札ムマシトノ給へハユメノト口カタメテ林中ニ隠ヌ

（第一の一〇話）

右記の傍線部は、異本・静2本・祐本では欠字であるが、静1本・内本・武本では「努」とあり、他の平仮名本は片本と同じである。異本・静2本・祐本のように傍線部が欠けていると全く文意が通らない。なお祐本では右記の本文は「拝むましと

のたまへは　　く　と口かためて林中にかくれぬ」とあり、  
「のたまへは」と「く」との間が五字分空白になっている。  
このことは祐本が親本に忠実であることを示していると言  
える。祐本が親本に忠実であることは、「車の扇キタをすたれをや  
りおとしてけり」(第一の五三話)に「本ノマ、」とある書き  
入れ、「かななし」(第三の一話)に「本ノマ、」とある書き  
入れからもわかる。異本は翻刻したもので、写本ではどう  
なっているかわからないが、静2本では「のたまへは」と  
「く」との間には空白はない。

§ 異本・静2本・祐本の本文が同じで、他の平仮名本と異  
なるもの

御心中サコソ忍カタク覚サセ給ケメ　　(第一の一二話)

右記の傍線部は、異本、静2本・祐本では「いかに」とあり、  
他の平仮名本は片本と同じである。

皇子御誕生有テ程ナク位ニ即キ給後一条天皇是也

(第一の二四話)

右記の傍線部は、異本、静2本、祐本では「後一条院天皇」  
とあり、他の平仮名本は片本と同じである。「後一条院天皇」  
の「院」は衍字であろう。

大食調残ナクツクサレケリ　　(第一の四四話)

右記の傍線部は、異本、静2本、祐本では「尽させられ」、  
他の平仮名本では「尽され」とある。「尽させられ」の「せ」  
は助動詞であるが、「らる」は助動詞には接続しないので文法  
的に説明ができない。「尽させられ」は誤りである。

h 静2本だけが欠文のもの

兩風オホロケナラヌ日アリケリ左衛門陣ノ吉上云クタトヒ  
在衛ナリトモ今日ハ参カタシト　　(第六の三一話)

右記の本文は静2本では「ケリ」の「リ」が「れ」とあり、  
右記の傍線部は欠文である。右記の傍線部は、吉片本では「在  
衛」が「在衛」とあるが、他は片本と同じであり、他の平仮名  
本は「吉上云」が「吉上か云」とあるが、他は片本と同じであ  
る。

i 静2本の本文だけが孤立しているもの

秦始皇泰山ニミユキシ給ニ俄雨フリ五松ノ下ニ立寄テ雨ヲ  
過シ給ヘリ此故ニ彼松ニ位ヲ授テ五太夫ト云リ

(第一の一一話)

右記の傍線部は、静2本では「小松」、異本・静1本・内本・  
武本・祐本では「こまつ」とあり、京本・国本・天本・名本・  
吉本・彰本は片本と同じである。静2本の「小松」では後に  
「五太夫ト云リ」とあることから、文意が通らない。「こまつ」

と「小松」とを同じと考えなかったのは次のように考えたからである。「五松」「こまつ」「小松」の関係は、片仮名本が平仮名本に先行すること（『紀要三十周年記念号』二二項、三三項参照）から、「こまつ」は親本の「五松」を「こまつ」と読み「こまつ」と表記し、静2本はそれを「こまつ」と読み「小松」と表記したものであると考えたからである。

維摩経ニハ質直是浄土也ト説

（第六の三九話）

右記の傍線部は、静2本では「質直もつみおもくおほしめしけれと此度によりてめしこれ浄土なり」とあり、他の平仮名本は片仮名本と同じである。静2本の「もつみおもくおほしめしけれと此度によりてめし」は衍であろう。

j 静2本・祐本の本文が同じで、他の平仮名本と異なるもの

不運ナルモノヲハ所行事カラヨカラヌヤウニ思

（第三の序）

右記の傍線部は平仮名本では次のようになってゐる。

京・国・天・吉……………「ふこん」 名……………「ふかく」 彰・異……………「ふうん」 静1・内・武……………「ふうむ」 静2・祐……………「ふうき」

右記の平仮名本の本文を見てみると、静2本・祐本の「ふう

き」では文意が通らない。

以上の f・g・h・i・j の用例を見ると、f・g の用例から異本・静2本・祐本は親族関係にあると言える。また h・i の用例から、静2本は異本または祐本から出てきたということになる。この逆は考えられない。そして前掲の b、c と j の用例があることから、静2本は祐本から出てきたと言える（前掲の e の用例の取り扱いについては、前述したので略す）。しかし、前項の X、d の用例から静2本と祐本との関係は、親子関係とは言えないので、兄弟関係ということになる。なお静1本と静2本との関係については、前項の Y、Z と h、i とから親子関係にあるとは言えないので、兄弟関係ということになる。

k 静2本・片本・片仮名本の本文が同じで、他の平仮名本と異なるもの

公達ノ物仰ラル、ニ

（第一の六一話）

右記の傍線部は、静2本は片本と同じであるが、他の平仮名本は「君主」とある。

男ナリヒサコト云物ヲ腰ニ付テ酒ヲ沽ル家ニ行テ

（第六の二二話）

右記の傍線部は平仮名本では次のようになってゐる。

京・国・天・吉……………「一の」 名……………「人の」 彰……………「う

る」異本・静1・内・祐……「市の」静2……「詰る」武……「の」

彰本については三項の解明結果から問題にならないので、この用例をここに入れてもよいと思う。

趙柔ト云人

(第六の三三話)

右記の傍線部は、静2本は片仮名本と同じであるが、他の平仮名本は「趙」とある。

漢ノ楊震東萊ノ太守トシテ

(第六の三三話)

右記の傍線部は、彰本・静2本は片仮名本と同じであるが、他の平仮名本は「萊」とある。彰本については三項の解明結果から問題にならないので、この用例をここに入れてもよいと思う。

右記のkの用例から、静2本には片仮名本の影響があると言える。図式化すると次のようになる。

片仮名本……………

… 静2本  
… 祐本の親本  
… 祐本

## 九 内本・武本と平仮名本(乙グループ)の本文との関係はどうか

ここでは内本・武本の乙グループにおける本文系統について見てみようと思う。

一 内本・武本の本文が同じで、他の平仮名本と異なるもの  
オリシモウチ時雨タル空ノ気色 (第一の一八話)

右記の傍線部は、内本・武本では「しくれ時雨」とあり、他の平仮名本は片本と同じである。

m 京本・国本・天本・吉本・内本・武本で欠文のあるもの  
魚トルスヘモ知ネトモ自葛河ノ辺ニ臨テ衣ニタマタスキシ

テ魚ヲ伺テ子サキ鱈ヲ一二取テモチタリケリ禁制ノ重キ  
比ナレハ (第六の二三話)

右記の傍線部は、京本・国本・天本・吉本・内本・武本では欠文であるが、他の平仮名本では次のようになってる。

名……「して魚をうか、ひてちいさきはへと云魚を一つ二つとりてもちたりけり禁制のおもきころ」

彰……「して魚をうか、ひてちるさき鱈を一二取てもちたりけり禁制のおもきころ」

異・静1・静2・祐……「してちいさき魚を一二とりて持



たりけり禁制のをもき比」

右記の平仮名本の本文を見てみると、内本・武本は乙グループであるにもかかわらず、右記の傍線部が欠文である。

n 内本・武本・片本と甲グループの本文が同じで、他の平仮名本と異なるもの

コチナシトヤ思ケム

(第三の九話)

右記の傍線部は、異本・静1本・静2本・祐本では「あちきなし」とあり、他の平仮名本は片本と同じである。

o 内本だけが欠文のもの

実方中将イカナルイキトホリカアリケン殿上ニ参会テ云事  
モナク行成ノ冠ヲ打落テ小庭ニナケステ、ケリ行成少シモ  
サハカスシテ

(第八の一話)

右記の傍線部は、内本では欠文であるが、他の平仮名本は片仮名本と同じである。右記の傍線部はないと文意が通らないので、内本における本文の欠脱である。

p 武本・片本と甲グループだけに本文のあるもの

西の泉ノ透廊南へ永ク指出タル中ノ程一間上長押ヲウタサ  
リケリ

(第一の四一話)

右記の傍線部は、異本・静1本・静2本・内本・祐本では欠文であるが、京本・国本・吉本・彰本・武本では「廊南へ長さ

し出たる中程一間上長押をう、天本では「廊南へ長さし出たる・一間上長押をう」、名本では「廊南へ長さし出たり中程一間上長押をう」とある。

内へ入給へト云フヤヲラ入テ見レハ御スノ絶間ヨリ月ノ光  
クマナクテ指入タルニ

(第一の五三話)

右記の傍線部は、異本・静1本・静2本・内本・祐本では欠文であるが、京本では「云やをし入てみれば御簾の絶間より月の光」、国本では「云やをし入てみれば御簾の絶間より月の光」、天本・名本・彰本・武本では「云やをら入てみれば御簾の絶間より月の光」、吉本では「云やをら入てみれば御簾の絶間より月の光」とある。なお右記の本文で「クマナクテ」は、異本・静1本・静2本・内本・武本・祐本では「ひまなく」、京本・国本・天本、名本、吉本、彰本では「くまなく」とある。傍線部がなくても「クマナクテ」の箇所が「ひまなく」とあれば文意は通らないことはない。

q 武本・静2本・片仮名本と甲グループだけに本文のあるもの

鳥羽法皇ノ御夢ニ御覽スルヤウヨニケタカクヤムコトナキ  
翁ノ東帯ニテ御枕ニ立テ

(第一〇の一五話)

右記の傍線部は、異本・静1本・内本・祐本では欠文である

が、京本では「よにけたかけにやむことなきおきななの東帯にて」、国本・天本・名本・吉本・彰本・武本では「よにけたかけにやむことなきおきななの東帯にて」とあり、静2本は片仮名本と同じである。

r 武本と甲グループの本文が同じで、他の平仮名本と異なるもの

此文ヲマイラセ候ハント云テ指置タルヲミレハ

(第一〇の四六話)

右記の傍線部は平仮名本では次のようになってゐる。

京・国・天・名・彰・武……「ひろけてみれば」 異・静

1・内・祐……「ちかつけて見れば」

静2……「をひろけてみれば」

以上のl、m、n、o、p、q、rの用例を乙グループだけに絞つて見てみると、l、m、nの用例から内本・武本は親族関係にあると言える。またoの用例から、武本は内本から出てきたのではないと言える。しかし、内本と武本とが親子関係(「武本↓内本」)にあるのか兄弟関係にあるのかは判断できない。またp、q(静2本の本文の性格については、別稿で解明したい。)の用例から、武本には甲グループ・片仮名本の本文が混在していると言える。そしてその混在本文はrの用例から甲

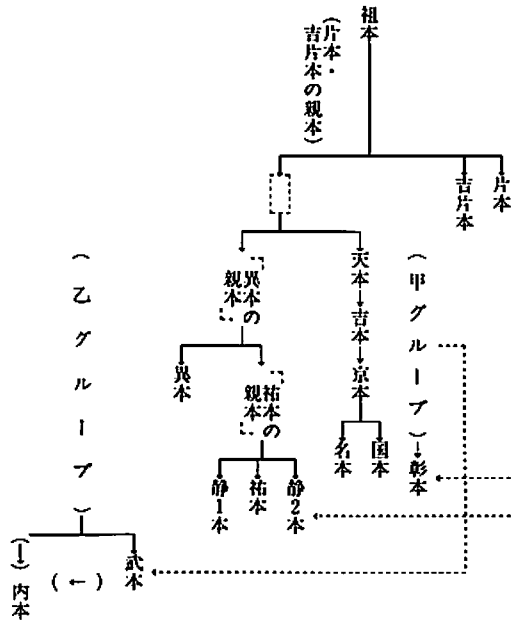
グループのものであると言える。qの用例もその一助になると思う。もし混在本文が片仮名本の本文であるならば、qの片仮名本の「御覽スルヤウ」の本文も武本にあるはずであるから。

武本の甲グループの本文の混在は、武本の親本に甲グループの本文が書き入れとして校合されていて、その書き入れを武本の書写者が本文の中に取り入れたために起こったものであろう。

pの「第一の五三話」の「クマナクテ」が甲グループでは「くまなく」とあるのにもかわらず、武本は乙グループの「ひまなく」とあるのもこのことを示していると言える。内本・武本は乙グループであるが、内本・武本のペースが乙グループのどの本文であるかは判断できない(七項のaの一例からだけでは、静1本と内本・武本の間を判断することはできないから)。

六項の図式と七項、八項、九項の結果とをまとめて図式化すると次のようになる。

(片 仮 名 本)



\* 内本と武本とは親子関係(武本↓内本)か兄弟関係か不明であるので、右記のようにして整理した。